



学士課程教育における共通教育の質保証：
成果と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017141

学士課程教育における共通教育の質保証

— 成果と課題 —

高橋 哲也

(大阪府立大学)

〔キーワード：学士課程教育，共通教育，質保証〕

はじめに

本課題研究は、分野別質保証の議論では欠落しがちな、共通教育の質保証を主要な対象とする研究として、2013年度から研究を進め、今回最後の課題研究集会シンポジウムを迎えることとなった。広範な内容を包含するテーマであることから、4つのサブテーマに沿って研究を進めてきた。

今回のシンポジウムではそれぞれのサブテーマの統括者からこれまでの研究の成果と課題について報告が行われ、小笠原会長に指定討論者として登壇していただいた。課題研究シンポジウムは今回が最後であるが、本課題研究のテーマは本学会が継続的に追求していくべきものであり、各サブテーマではそれぞれの研究のフィールド校での実践を含め緒についたばかりであり、研究は今後も継続される予定である。

それぞれのサブテーマについての報告は本号に掲載され、それぞれの成果が示されるため、本稿では、課題研究全体についての成果と課題について述べる。

1. サブテーマの関係と課題

前述のように、本課題研究は4つのサブテーマを設けて研究を実施してきた。サブテーマ間の関係については図1に集約される。

課題研究としては、これらの間の連携を図り、共通教

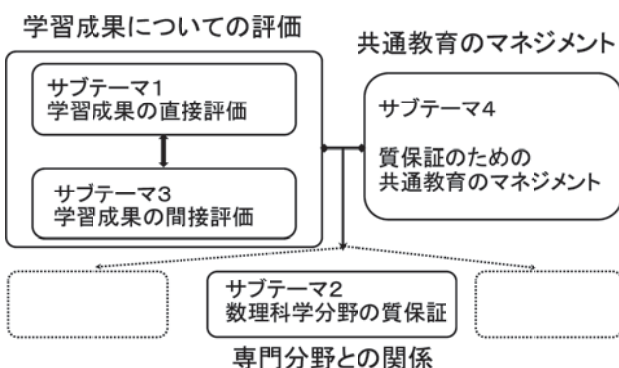


図1 サブテーマ間の関係

育としての質保証について研究する予定であったが、それぞれのサブグループの研究成果を統合していくことには多くの課題が見えてきた。例えば、サブテーマ2は特定の学問分野に対して、他のサブテーマの結果も含めて検証する予定であったが、学習成果についての評価の部分はそもそも目標設定自体が行われていない大学が多く、本課題研究としては成果発表まで至っていない。

なお、以下に述べるのは本課題研究の代表者として全体の研究を見渡しての個人的な感想であり、その検証と改善についての今後の研究が必要である。課題研究メンバーの意見を代表しているわけではないことを申し添えておく。

2. 共通教育の質保証の問題点

FDがマイクロ、ミドル、マクロの3つのレベルで考えられるのと同様に、学習成果の把握についても、マイクロ(個々の授業)、ミドル(カリキュラム)、マクロ(大学、学部全体の学習成果)といった対象があり、対象ごとに分けて考える必要がある。このような階層や局面に応じた検討の必要性は、サブテーマ1や3ではルーブリックの階層性や直接評価・間接評価の併用・統合のさせ方の問題として、また、サブテーマ4ではマネジメントに関する今後の課題として指摘されている。現在、学位プログラムでの3つのポリシーの策定が求められ、「学位授与の方針(Diploma Policy)」が達成されているかを考えることが重視されている。今後、学位プログラム(多くは学科のカリキュラム)の質保証という観点の重要性が増してくると思われるが、共通教育の質保証をどう考えるかということはその点でも重要な課題となる。なぜなら、卒業に必要な単位数の2割から3割は「共通教育」(初年次教育、語学教育、教養教育、基礎教育……)の範疇であり、この部分でどのような能力を身につけているのかを検証することが必要となるからである。しかし、学位プログラムを作成する主体には共通教育の責任者は不在であることが多い。例えば、大学全体の目標として数学的リテラシーが掲げられていて、学部・学科等のDPにも含まれていたとしても、その能力

の質保証に責任を持つ組織がどこなのかが不明確なことが多いのである。この質保証の作業はカリキュラム作成組織と実施組織が協働して行うほかないはずであるが、学部・学科等のカリキュラムの策定に共通教育の責任組織が関与するといった枠組み自体が構築されていないのが現状である。

但し、「共通教育」の中ではこのような協働が機能しやすいのが「初年次教育」のようである。本研究でも、いくつかのフィールドで初年次教育として全学で行われているプログラムの検証、数多くの科目に共通のルーブリックの作成、といった取組が報告されている。全学として（あるいは学部全体として）の目標設定が明確でその部分での検証が容易であり、実施自体も全学の教員の協力のもとで行われている部分については、質保証に向けての取組が進んでいる大学がかなり見られたことは、今回の研究の成果の1つと考えられる。

おわりに

所属する大学では共通教育の企画・実施組織の管理職

を5年務めているが、教員数が減っていくなかで科目の維持すら覚束ない状況である。ところが、共通教育には初年次教育、キャリア教育といった新しいテーマも求められるようになっており、組織の状況とミッションの重さがますます釣り合わなくなってきている。本学会としては、この状況を打開するための知見を提供していくことが求められている。研究メンバーの努力により、そのための方法論やツールを一定提供は出来たのではないかと考えるが、出来なかったことの方が多く、継続した研究と実践が必要である。

本課題研究は20名以上研究メンバーからなる大規模なものであり、研究フィールドとして協力していただいた大学の関係者の方々、複数回にわたる全国調査に協力頂いた会員の皆様に心から感謝の意を表したい。課題研究全体の成果（論文、発表資料等）については、この後、冊子体としてまとめるとともに、学会のウェブサイトを通して、会員各位がダウンロード可能な形で公開する予定である。